

検証

防潮堤計画

気仙沼

③

気仙沼市の唐桑半島の付け根部分に位置する舞根湾。森に囲まれた小さな湾に、漁師が山に木を植える「森は海の恋人運動」で有名な水山養殖場があり、体験学習や施設などで国内外から多くの人が訪れる。

リアス式海岸の複雑な地形に守られた、天然の良港のため、漁港に堤防は整備

備されていない。そこを東日本大震災の大津波が襲い、沿岸で暮らしていた52世帯のうち44世帯の家が流失し、近くの高台へ防災集団移転が決まった。

津波のショックで地域を離れようとした人も多かったというが、もう一度、海の側で心豊かに暮らすことを住民は選択した。

その決断を揺るがしたのは、この地域を含めた唐桑半島西部に示された海拔9・9以上の堤防計画だった。もともと堤防がなかったため、災害復旧工事の対象にはならないが、いままら国の手厚い財政支援を受け、明治

三陸級の津波に備えた堤防を構築できるからだ。

住民高台に移転するべきものない

舞根2区の住民は

と菅原茂市長に思いを伝えた。

菅原市長は「堤防が守るのは命と財産だが、財産とは家屋だけではない。津波の度に産業基盤を失い、多くの失業者を出すわけにはいかな」と堤防の必要性を説いた。

堤防高については、県も例外を認めている。背後に保全する重要な施設（道路などの公共施設・居住地など）が無く、国土保全を目的とする海岸堤防は、震災前の堤防高で復旧する一の方針を示し、実際、気仙沼

千潟でアサリ 稚貝成長

震災から1年4カ月が過ぎようとして、舞根湾の自然は、驚くほどの早さで再生しようとしている。津波でできた水たまりが干潟状態となり、小魚が泳

は、県も例外を認めている。背後に保全する重要な施設（道路などの公共施設・居住地など）が無く、国土保全を目的とする海岸堤防は、震災前の堤防高で復旧する一の方針を示し、実際、気仙沼

は、県も例外を認めている。背後に保全する重要な施設（道路などの公共施設・居住地など）が無く、国土保全を目的とする海岸堤防は、震災前の堤防高で復旧する一の方針を示し、実際、気仙沼

不要な所に造らない

唐桑 舞根湾 自然再生、生き物戻る

しかし、この地区

に於いては「もともと堤防がなく、守らなければならぬ施設」の予定もない」と理解を示し、「現地を確認してから判断するが、現段階ではこのまま堤防を整備しない方向で進めたい」と答えた。

市内でも唐桑の中井地海岸など多くの場所、震災前の高さで復旧計画を立てている。

市も「不要なところには造らない」との考えで、管理するすべての漁港堤防をかさ上げするわけではないのだ。

「現地を確認してから」という市の最終決定はまだだが、地域では堤防が造られないことを前提に、津波被害を受けた低地を干潟にし

ようという計画が着々と進んでいる。NPO法人「森は海の恋人」（畠山重篤理事長）が中心となってイメージを描き、支援先を探しているが、さまざまな団体や企業や関心を示している。

「津波でたくさんものを失ったが、干潟という宝物を得た。動き始めれば、手を伸ばしてくれる人がいることも分かった」と副理事長の畠山信さん(33)。

干潟で舞根に観光客を呼び込むこと

で、地域の活性化を目指している。

畠山さんは、自然を破壊する堤防計画に疑問を抱き、住民に説明を繰り返し、「一番説得力ある」と考えて署名を集め、市への要望活動につなげた。要請があれば、他地区でも応援へ駆けつけたという。

行政が堤防で守ろうとしている価値観とは別に、住民にも守りたいものがある。

守るものは

行政が堤防で守ろうとしている価値観とは別に、住民にも守りたいものがある。

行政が堤防で守ろうとしている価値観とは別に、住民にも守りたいものがある。

行政が堤防で守ろうとしている価値観とは別に、住民にも守りたいものがある。

行政が堤防で守ろうとしている価値観とは別に、住民にも守りたいものがある。

行政が堤防で守ろうとしている価値観とは別に、住民にも守りたいものがある。

行政が堤防で守ろうとしている価値観とは別に、住民にも守りたいものがある。

行政が堤防で守ろうとしている価値観とは別に、住民にも守りたいものがある。



東日本大震災でできた水たまりに小魚が泳ぐ（唐桑町舞根）

（今川悟）